

日本の近代化と絹織物産業（Ⅱ）

A Study of Japanese Modernization and the Silk Industry (Ⅱ)

廣田 政一
Masakazu HIROTA

Keywords : Row Silk, Silk Fabric, Silk Merchant

キーワード : 生糸、絹織物、生糸商人

1. はじめに

（研究の背景と目的）

日本の絹織物産業の発展に商人の果たした役割は大きい。2014年の夏日本の代表的な絹織物産地である伊勢崎（群馬県）、長浜（滋賀県）、米沢（山形県）、鹿児島（鹿児島県）の織物組合や織物業者の現場を訪問した¹⁾。多くの関係者とのヒアリングやその根拠となる資料を入手し、まとめたのが本論文である。研究の調査目的は、第1に、江戸時代から近代にかけての各地域の歴史的過程、特に商人の活動や流通、現在に至る織物組合などの活動状況を紹介し絹織物産業が日本の近代化に果たした役割を論ずる。日本の絹織物産業は平安時代末から鎌倉時代の初期に京都の西陣で発生したといわれている。当時は農家の養蚕、製糸、製織が未分化であったが、次第に製織部門が独立していった。「伊勢崎市織物の歴史とあゆみ」によると1759年には伊勢崎の絹の取引は大織で、江戸文化の最盛期は需要が増大し他の地方より原料を購入し、紺屋に染色を依頼し適宜、縞組を指定して賃機織に出す元織屋（もとはたや）が現れた。一方、長浜の絹織物といえば、浜縮緬が有名である。それまでは浜絹、浜羽二重が特産品であったが、長浜が（1）養蚕の盛んな琵琶湖の北にあったこと、（2）京都や大阪の消費地に近いことであった。米沢織物は袴地で全国的に知られている。米沢の袴地といえば新田（につた）に相当し、新田製袴と言えは米沢を想う。又、紅花は山形の県花であるが、米沢織の紅花紬の紅花染めは（株）新田が手広く手掛けており創業者である新田留次郎が米沢出身で慶応元年に城下で生まれている。初代の頃から絹織物に力を入れてきた。「大日本化学工業」（大正12年）によれば新田工場の袴地生産は40年余り好調で追従する者はなかったといわれる。そのため、織機を増設し、日夜、生産に追われた。現在でも米沢平（袴地）と紅花紬を生産している。鹿児島では大島紬を生産し上質の絹糸を使用し泥染の独特な技巧により織られた着物は模様が鮮やかで全国的に知られている。さらに、本論の第2の目的は、最近の絹織物の変遷にも触れ、

日本の人口減少や若者などの着物に対する関心の低下²⁾による国内需要が減り、養蚕農家の減少、生糸生産や価格の低下などから生糸や絹糸は海外からの輸入に大きく依存している現状である³⁾。なお、本調査研究は目白大学第8号（平成24年2月）「日本の近代化と絹織物産業（I）」の続編である。

2. 伊勢崎の絹織物産業の発展と特徴

2-1 江戸時代の絹織物

伊勢崎市は首都圏の北部に位置し、人口約13万人の地方都市で近年は多様な産業が存在する。桑園のあるところには絹織物が興り地場産業として世に出たのは15世紀に至り、市（いち）が立ってからである。江戸時代の八代将軍吉宗の時は太織が世間の嗜好となり、その名は全国に広まった。その原料は、農家が農繁期を利用して手製の熨斗糸または、多摩糸、伸び糸等を作り、これを「いざり機（いざりばた）」にかけ、一本一本手織りしたが地質が丈夫であり、渋みのあることから。庶民性が高かった。すべてが先染めで、「伊勢崎紺（かすり）」として生産され、その後の絹を素材にした平織の「伊勢崎銘仙（めいせん）」とともに伊勢崎産地の名声を高めている。この時に販売先として近江商人が登場しているのは興味深い。

元文3年（1738年）伊勢崎藩主に提出した茂呂村の書状：

『絹織出し六百疋程、但し近年繭にて近江商人に売渡し、または糸に仕候』

宝暦9年（1759年）には伊勢崎での絹市の取引は増加し、江戸文化の最盛期には需要が増大したため原料を購入した。また、賃機に出す元機屋（もとはたや）が出現した。当時の太織は縞柄に限られていたが、これが今日の伊勢崎紺の基礎となっている。太織の名称は明治20年（1887年）頃、伊勢崎太織の販売店が日本橋伝場町に「めいせんや」の旗を立てたのがのちに「銘仙」の文字をあてたという説がある。

2-2 元機屋の登場（活動と役割）

絹の需要の増大に伴い、18世紀の江戸では養蚕が盛んになり、市には絹商人が集まり、売買を世話する絹宿や織物を製造する元機屋が登場した。自己資金で糸を買い付け、それを自ら染色するか、紺屋に糸染めを依頼し、指定の縞柄をつけ、農家に機織りを依頼した。織りあがった製品は、元機屋で仕上げられ、市の絹宿を経て江戸や京都の呉服問屋に送られた。また、元機屋の登場により紬は作業工程が分業化され、大量生産が可能となった。

2-3 明治以降の絹織物産業

2-3-1 伊勢崎織物組合と設立と買継商（仲買賞）の登場

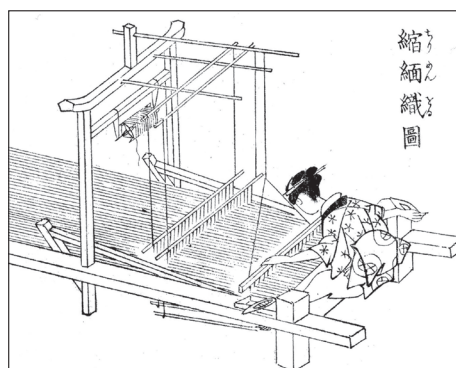
絹の撚糸が経糸に取り入れられ伊勢崎紬は珍重された。また、品質向上のために明治13年

（1880年）に伊勢崎太織会社が設立されている。その後、同社は伊勢崎織物組合に改組され、明治31年（1898年）には伊勢崎織物共同組合となり現在に至る。この頃から織物生産者と販売業者、大口購入者、呉服店、デパートとの間を仲介する仲介商（買継商）⁴⁾が登場した。江戸中期、伊勢崎で仲買人的な役割を果たした絹宿が前身であり明治後期以降の伊勢崎銘仙の発展に大きな役割を果たした。また、明治18年（1884年）にはジャガード織機⁵⁾を購入し、門買絹を作り横浜居留の外国人と取引をした。伊勢崎の輸出織物の始まりと言える。

2-3-2 黄金時代

江戸時代の「いざり機」に変わり明治20年以降には高度な「高機」（図-1）に移行し現在も使用されている。大正時代には紬織物は急速に拡大していった。

明治の黄金時代1次では力織機が導入され伊勢崎銘仙の種類も増えた。昭和初期の黄金時代の第2次には加工法を工夫し人絹糸を使用して新しい織物の需要に応じた。絹織物に最初に力織機を導入したのは桐生である。



（図-1）高機による縮緬織り

（出所）「糸の世紀・織りの時代—湖北・長浜をめぐる糸の文化史—」 長浜市長浜歴史博物館

3. 長浜の絹織物産業の発展と糸商人の役割

長浜の絹織物といえば、浜縮緬（ちりめん）、浜ビロードが有名である。江戸時代の中期は浜糸、浜絹、浜羽二重が特産品であった。その背景には環境と立地条件の有利さに集約される。①長浜が養蚕の盛んな湖北に位置していた有利なこと、②京都や大阪の大市場が近くに存在していたことである。長浜で生産された生糸（浜糸）や浜絹は浜糸商人により京都の糸問屋に売られた。（図-2）は京都の西陣に糸を運ぶ浜糸商人の様子を示したものである。浜糸商人は元禄10年に豪商の三井家と取引交渉を始めている。三井家はのちに京都に呉服店を開き「越後屋」を開店した。さらに京都両替店も開設し多角的な経営を行い戦後の政商⁶⁾や三井財閥の基礎を築いている。越後屋は三越の原点で（現在の伊勢丹三越）である。



（図-2）浜糸商人が浜糸を西陣に運ぶ様子

（原典）成田思斎「養蚕絹織」

（出所）図-1と同一

（浜縮緬の由来）

江戸時代の縮緬の産地としては西陣や桐生などが知られているが、長浜の縮緬は「浜縮緬」

と呼ぶ。浜縮緬は「丹後ちりめん」などとともに日本を代表する絹織物であり長浜では基幹産業となっていた。縮緬の技術は（図-3）のように中国から大阪の堺に伝来し、京都の西陣さらに京都の北部から桐生や長浜に伝わっている。浜縮緬の機織は高機であった。江戸時代の縮緬製機は手織りで、高機と呼ばれる作業位置の高い機が使用された。（伊勢崎のいざり機とは異なるが伊勢崎でも明治以降には高機が導入されている。）

（浜縮緬の流通経路）

（図-4）は1760年ごろで、機屋で織られた浜縮緬は蔵元から彦根藩代官所、京都藩邸に運ばれた。その改印と売り捌きの特権をもつ近江屋喜兵衛を経て京都に売られた。（図-5）は55年後の1815年の流通経路である。「機屋仲間」が入り彦根藩の統制が強化されていることが分かる。

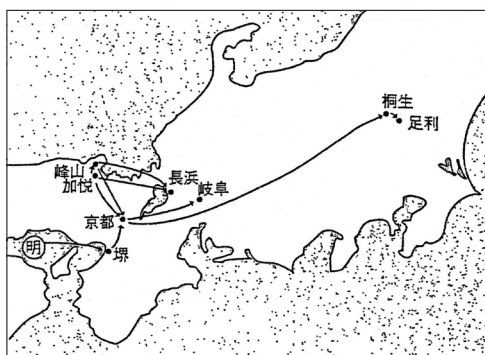
（近江商人）

近江の織物は長浜の絹織物、湖東の麻織物、高島地域の綿織物に大別される。これらの織物は江戸時代に県外への流通が行われた。近江商人は織物の品質や技術面の内容から販売方針まで現在のコンサルタントのように生産活動の指導を行い、時代の要求に応えた。近江のものづくりを采配し地域の織物を全国に広めた功績は大きい。

（長浜縮緬の貿易〈輸出〉）

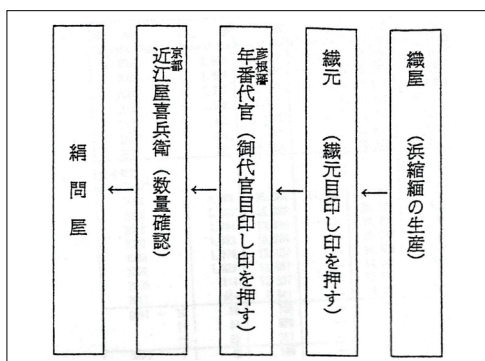
文献や資料は極めて少ない。三島幸雄の文献⁷⁾によると、明治7年に設立された起立工商会社の縮緬貿易を紹介する。同社が輸出した損益計算書は（表-1）の通りである。

売上高利益率は8.4%¹⁰⁾と好調であった。日本の絹織物は明治20年（1887年）頃から輸出産業としての地位を築き、長浜縮緬は英国や米国への輸出を始めており、この輸出の事例でもこれらの国へ輸出したと考えられる。



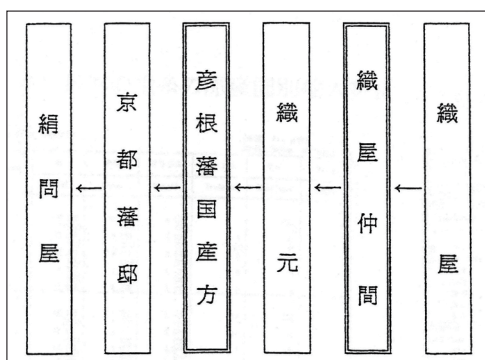
（図-3）縮緬の伝播ルート

（出所）長浜商工会議所



（図-4）花縮緬の流通ルート（Ⅰ）

（出所）図-3と同一



（図-5）専売後の花縮緬の流通ルート（Ⅱ）

（出所）図-3と同一

（浜縮緬の近代化）

明治維新になると幕藩体制における商業や流通の保護や統制が排除され長浜の糸商人は浜縮緬の販路を各地に広げていった。長浜織物の近代化の始まりである。

浜縮緬は国内での統制が排除されたことから国内市場は拡大した。しかし、新機械の導入と輸出産業への転換の遅れから経営規模の拡大は行われなかった。一方、明治維新後のジャガードや力織機などの洋式織機の導入により桐生、足利、伊勢崎、八王子は絹織物の近代化を推進させ、特に輸出用の羽二重の生産には大規模なマニファクチュアが桐生、足利などに導入され経営規模が拡大された⁸⁾。長浜では新技術の導入や規模の拡大が行われなかった。その理由は①縮緬生産者が輸出用は羽二重の生産に消極的であった。②縮緬生産以外に企業家的革新を要求しない保守的な気質が生産者にあった。

（表－１）輸出縮緬の損益計算

（明治12年）

原 価	縮緬 20疋	408.000
	絹縮 10疋	170.000
	合計	578.000 円
売 価		1403.087 円
諸 費 用	米國輸入税・運賃・税関手数料	316.514
	内國輸出税	28.900
	領事検印料	2.078
	海上保険料	6.405
	開通社手数料	1.494
	三井組手数料	0.024
	横浜まで運賃	0.500
	外箱代その他荷造諸費	4.600
	起立工商会社手数料 (売高100ドルにつき15ドル)	210.458 円
	合 計	570.973 円
純 利 益		254.114 円

（出所）三島康夫「長浜縮緬の専売と織元」

4. 米沢の絹織物産業と紅花染め

米沢は袴織りで名声をあげ昭和38年には「紅花染め」を復活させ米沢平（袴地）と紅花紬は2つの米沢特産である。今回訪問した（株）新田はその伝統を受け継いでいる。

初代留次郎は明治17年（1884年）に手織高機で袴地を織っている。米沢が織物で栄えた理由は①織物の原料に適した土地である。②織物を奨励した藩主がいた③豪雪地帯で農民も武士も冬季には屋内の選択をした。

- ・（袴地）：からむし（青そ）に絹を組み合わせた生地は男物の正装に使われる高級織物としての評価が高い。現在でも袴は全国の9割のシェアを持つ。また、この「からむし」は奈良や京都にも販売され米沢商人が販売していた「旅出し」と言う。
- ・（紅花紬）：原料となる紅花はエジプトが原産地である。シルクロードを経て中国にもたらされた。その後、日本に入ってきたとされる。山形の紅花は最上紅花と称し、16世紀に栽培された。最上紅花を語るときには最上商人の華やかな活躍の最先端には「サンベ」という人たち（裏方）の貢献が大きいことを忘れてはならない。紅花の荷主より紅花仕入金を前借し朝早くから各地の紅花農家をかつぎ棒で生花買い商人の手に渡したという。鈴木清風という商人は活躍した例である。紅花と農家の様子は「四季農戒諸」（17世紀）に記載されている、「紅花の畑のある家では花摘みに励むこと。紅花の出来が良い時は、朝早く起きて女、子供まで総出で働くようにすること。——」なお、米沢織の紅染めの代表的な会社である（株）

新田の社長と紅花染めの苦労話についてヒアリングをしたところ、新田富子が詩集¹⁰⁾でその様子を記述している。

米沢織物の近代化は明治政府が配給した債券を米沢藩の武士が受け取り、武士はこの資金で機を購入した。公債機と呼ばれ、多くの機屋が存在し化学染料も輸入され織物の生産が増加した。しかし、昭和に入ると、繊維産業が衰退し、中国やブラジルからの輸入が増え、機屋は減少し、織物産業は衰退していった。

5. 最近の絹織物の変遷（生糸、絹糸、絹織物の生産と貿易）

1) 世界主要国の家蚕生糸生産数量

世界の主要国の2005年-2010年のトン及び俵の生産量（暦年ベース）を示した（表-2）によると日本はこの6年間で生産量は大幅に減少している。（151トン→53トン）。一方、世界最大の生産国である中国は生産を増加させ（87千トン→95千トン）、第2位のインドはほぼ横ばいであった、また、ブラジルは中国やインドと比較して生産量が少なく減少傾向にある。（1.2千トン→0.7千トン）

（表-2）世界の主要国の家蚕生糸生産数量の比較

（2005-2010年）トン

（国名）	2005年	2010年	増減
日本	151	53	減少
中国	87,761	95,778	増加
インド	15,445	16,360	余り変化なし
ベトナム	2,250	2,250	変化なし
ブラジル	1,285	770	減少

「シルクロード（2013年5月号）より筆者が作成
（原典）日本：農水省、中国：シルク協会等

2) 日本の生糸の需給及び絹糸・絹織物の貿易状況

（表-3）は日本の2005年-2011年の各製品の輸出入（暦年ベース）を示している。

（1）生糸は生産量が減少し輸入でその補てんをしている。例えば、①輸入依存度は高い水準で推移している。（2005年の89%〔22, 017/24, 525〕から2011年の92%）②貿易に占める輸入の割合は84%（2005年）と高い。③前月の在庫数量と生産と輸入の合計から輸出と期末在庫数量の合計を差し引いた国内取引数量は過去6年間に大幅に減少している（約60%）。その要因として川下の絹糸（同期間46.4%減）や絹織物（同期間46.6%減）が半減し、全体として絹織物に対する需要が減少しているからと考えられる。

（2）絹糸の輸入は減少傾向にあるが輸出と比べ極めて多い。例えば、2011年の輸入/輸出比率は111.6倍であった。

（3）絹織物の内需が低迷し人件費の高騰などにより輸出競争力が低下したことから輸入量と輸出量は減少している。（但し、輸入は依然として高止まりの傾向にある）

日本の生糸と絹織物の輸入先（2008-2012年）を主要国からみると、生糸の輸入は中国からが最大で大半を占め、ブラジルが続く。この2か国で輸入の大部分を占める（表-4）。一方、

(表-3-1) 日本の製糸需給及び絹糸・絹織物の輸出入状況

年 月 Year & Month	項 Item	生 糸 Raw Silk					絹 糸 Silk Yarn		絹 織 物 Silk Fabrics	
		生産数量 Production (A)	輸入数量 Imports (B)	輸出数量 Exports (C)	国内引渡数量 Domestic Deliveries (D)	期末在庫数量 Ending Stocks (E)	輸入数量 Imports (F)	輸出数量 Exports (G)	輸入数量 Imports (H)	輸出数量 Exports (I)
暦 年 Calendar Year		Bales of 60kg	Bales of 60kg	Bales of 60kg	Bales of 60kg	Bales of 60kg	Bales of 60kg	Bales of 60kg	1000SM	1000SM
2005		2,508	22,017	4,125	26,429	8,178	32,700	609	15,999	8,252
2006		1,956	19,974	—	20,752	9,356	31,524	568	12,959	7,578
2007		1,747	12,601	—	15,624	7,879	19,439	404	11,355	7,184
2008		1,588	15,031	—	20,115	4,584	22,636	466	11,640	7,126
2009		1,152	12,085	—	13,766	4,055	16,647	388	8,996	6,269
2010		882	12,209	—	13,817	3,329	16,306	324	9,029	6,299
2011		731	9,323	—	10,926	2,456	17,526	157	8,546	1,507
生糸年度 Silk Year										
2004		3,868	20,154	11,500	27,002	7,274	30,204	565	14,130	7,286
2005		2,024	26,365	—	25,737	9,926	36,113	500	16,121	8,655
2006		1,794	13,394	—	16,873	8,241	21,561	534	10,730	7,152
2007		1,762	15,564	—	20,286	5,281	22,936	433	12,255	6,087
2008		1,378	12,137	—	14,638	4,158	18,716	378	10,320	6,806
2009		1,029	12,857	—	14,383	3,661	17,481	366	8,639	6,182
2010		814	12,207	—	13,815	2,935	16,307	324	9,000	6,299
2011		654	8,541	—	9,907	2,348	15,540	433	7,725	5,945
2011 - 10		56	765	—	790	2,462	1,165	78	515	530
11		64	550	—	820	2,256	1,202	47	656	469
12		52	717	—	569	2,456	1,001	32	636	508
2012 1		42	1,185	—	992	2,691	1,590	39	804	291
2		47	481	—	761	2,458	758	13	242	513
3		48	870	—	970	2,467	1,143	37	782	555
4		56	0	—	491	2,032	1,092	25	564	506
5		53	1,757	—	1,494	2,348	1,531	11	668	438
6		49	460	—	631	2,226	1,316	40	692	479
7		36	637	—	627	2,272	1,544	38	605	483
8		24	903	—	626	2,573	1,499	18	575	423
9		33	891	—	1,035	2,462	1,365	6	630	462
10		38	799	—	708	2,591	1,523	43	665	494
11		36	1,122	—	1,062	2,687	1,612	35	624	432

資料：(A) (C) (D) (E) 農林水産省生産局調査。(B) 財務省関税局調査、ただし96年1月から08年3月までの輸入は、農畜産業振興機構調査の実需者輸入分と一般者輸入分を合わせた数値。(F) (G) (H) (I) 財務省関税局調査。

備考：1. 国内引渡数量(D) = [前月在庫数量 + (A) + (B)] - [(C) + (E)]。

2. kgを60kg俵に換算しているため、各月の計と合計とが一致しない場合がある。

Source：(A) (C) (D) (E) The Agricultural Production Bureau, Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries.

(B) The Customs Bureau, Ministry of Finance. But the figures for raw silk imports have been based on data of the Agriculture & Livestock Industries Corporation since Jan. 1996 until Mar. 2008, excluding bonded silk.

(F) (G) (H) (I) The Customs Bureau, Ministry of Finance.

Remarks：1. Domestic deliveries (D) = [Stock at end of the previous month + (A) + (B)] - [(C) + (E)].

2. Monthly volume may not add up the total volume due to round off.

(出所) 「シルクレポート」(2013年5月号)

(表-3-2) 日本の生糸貿易及び国内取引(国内引渡数量)の変遷
(2005-2011年)〈暦年ベース〉

(項目)	2005年	2011年	増減
①輸入依存度 (輸入/生産+輸入)	89.8%	92.7%	増加
②貿易比率 (輸入/輸出+輸入)	84.2%	—	—
③国内引渡数量 (俵(60kg))	26,429	10,926	減少 (58.7%減)

(出所) 表3-1より筆者が作成

絹糸の輸入は中国からが最大（32%のシェア）でベトナムが続く。この2か国にブラジルを加えると輸入の大半を占める（表-5）。一方、目を変えて、日本の主要な輸入相手先である中国とブラジルから見た日本への輸出の順位（2012年）〈前掲のレポート〉を分析すると、中国では生糸はインドが1位で日本は4位、絹糸は日本が1位でインドが2位、絹織物はパキスタンが1位で日本は7位であった。一方、ブラジルは生糸と絹糸を合わせた輸出数量（2011年）の最大の相手国は日本で、そのシェアは全体の約50%を占める。ベトナムが2位（25%）で、これは日本への輸出量50%の半分程度で近年、シェアの差を広げている。なお、ブラジルの過去5か年間の平均シェア（2007年-2011年）は39.6%で日本がほぼTOPランナーとなっている。以上から、①中国はインドに、ブラジルは日本に目を向けていること、②日本の生糸の

（表-4）日本の生糸の原産国別輸入数量

Raw Silk Imports

(単位：60kg俵)

(Unit: Bales of 60kg)

国名 Country	計 Total	中国 China	ブラジル Brazil	ベトナム Vietnam	タイ Thailand	その他 Others
年 月 Year & Month						
暦 年 Calendar Year						
2008	15,242 (137)	10,969 (102)	4,152 (35)	-	122 (-)	-
2009	12,085 (72)	8,170 (51)	3,855 (21)	0 (-)	41 (-)	-
2010	12,209 (65)	8,411 (40)	3,706 (25)	0	32	-
2011	9,323 (45)	7,170 (20)	2,136 (25)	0	5	-
2012	10,032	8,628	1,403	0	0	-
生糸年度 Silk Year						
2008	12,138 (103)	8,572 (89)	3,435 (14)	11	122	-
2009	12,857 (66)	8,787 (38)	3,896 (28)	11	73	-
2010	12,172 (79)	9,062 (65)	3,068 (14)	1	39	-
2011	8,602 (17)	6,846	1,754 (17)	1	39	-
2011 - 4	372	316	56	-	-	-
5	1,280 (11)	1,082	198	-	-	-
6	760 (7)	416	344 (7)	-	-	-
7	489 (10)	389	100 (10)	-	-	-
8	547	292	254	-	-	-
9	420	420	-	-	-	-
10	765	491	272	-	3	-
11	550	325	225	-	-	-
12	717	697	20	-	3	-
2012 - 1	1,185	1,149	36	-	-	-
2	481	289	193	-	-	-
3	931	870	61	-	-	-
4	0	0	0	-	-	-
5	1,757	1,508	249	-	-	-
6	460	360	99	-	-	-
7	637	526	110	-	-	-
8	903	817	81	-	-	-
9	891	750	141	-	-	-
10	799	660	139	-	-	-
11	1,122	963	159	-	-	-
12	867	736	130	-	-	-

資料：財務省関税局調査

備考：1. kgを60kg俵単位に換算してあるので、国別の計と合計が一致しない場合がある。

2. () 書きは、玉糸の輸入数量で内数である。

Source：The Customs Bureau, Ministry of Finance.

Remarks：1. Country volume may not add up the total volume due to round off.

2. Figures in parenthesis indicate the break down for douppion silk imports.

（出所）表-3-1と同一

(表-5) 日本の絹糸の原産国別輸入数量

Silk Yarn Imports		(単位: 60kg俵) (Unit: Bales of 60kg)							
年月 Year & Month	国名 Country	計 Total	韓 国 S Korea	中 国 China	ベトナム Vietnam	イタリア Italy	アメリカ USA	ブラジル Brazil	その他 Others
暦 年 Calendar Year									
2008		22,636	143	12,513	6,865	12	—	3,204	12
2009		16,647	—	9,656	5,096	12	—	1,742	137
2010		16,306	—	9,675	4,161	16	—	1,716	205
2011		17,526	—	10,384	5,129	7	—	1,722	212
2012		16,179	—	9,926	4,908	79	—	1,107	224
生糸年度 Silk Year									
2008		18,716	23	10,677	5,700	11	—	2,242	64
2009		17,481	—	9,940	5,065	7	—	1,953	186
2010		8,101	—	5,186	2,238	8	—	591	81
2011		15,540	—	9,060	4,364	44	—	1,713	303
2011 —	1	1,790	—	1,108	543	—	—	139	—
	2	982	—	559	312	—	—	110	—
	3	1,858	—	1,244	467	2	—	134	10
	4	1,674	—	1,124	448	2	—	99	3
	5	1,797	—	1,151	468	1	—	109	68
	6	1,731	—	906	628	—	—	197	1
	7	1,489	—	910	432	0	—	155	1
	8	1,498	—	730	432	0	—	225	—
	9	1,340	—	745	543	1	—	51	—
	10	1,165	—	542	309	—	—	243	70
	11	1,202	—	672	297	—	—	232	—
	12	1,001	—	692	219	—	—	28	61
2012 —	1	1,590	—	1,075	353	—	—	80	82
	2	758	—	378	216	1	—	162	1
	3	1,143	—	747	281	2	—	113	—
	4	1,092	—	662	326	25	—	103	24
	5	1,531	—	1,001	328	15	—	124	63
	6	1,316	—	727	515	26	—	75	27
	7	1,554	—	907	488	—	—	97	62
	8	1,499	—	897	561	—	—	41	—
	9	1,365	—	773	506	1	—	73	12
	10	1,523	—	953	456	3	—	112	—
	11	1,612	—	982	568	5	—	56	1
	12	1,207	—	824	310	1	—	71	1

資 料: 財務省関税局調査。

備 考: kgを60kg俵単位に換算してあるので、国別の計と合計が一致しない場合がある。

Source: The Customs Bureau, Ministry of Finance.

Remarks: Country volume may not add up the total volume due to round off.

(出所) 表-3-1 と同一

輸入先（2012年）は中国が最大でブラジルは13%と小さいが、ブラジルからみると生糸・絹糸の輸出は最大となり48%を占める、ことが判明した。ブラジルにとっては日本の絹織物の需要の低下は絹貿易に少なからず影響を与えると懸念される。

6. おわりに

今回の調査研究は伊勢崎（銘仙）と長浜（縮緬）を中心に米沢（袴地、紅花染め紬）や鹿児島（大島紬）の絹織物研究を実施した。現地調査の結果、1）日本の人口減少や若者などの着物に対する関心の低下による国内需要の減少¹¹⁾（絹織物生産の減少）、それによる養蚕農家の

減少や海外からの安価な生糸・絹糸の輸入による生産価格の国際競争力の低下などから生糸や絹糸の海外からの輸入に大きく依存していることが判明した。このような変化の中で絹織物を伝統工芸の1つと捉え後世に伝えていく持続可能な発展が問われている。2) 個別の地域の絹織物産業と歴史的な過程や特徴を詳述してきたが、各地域にはそれぞれの顔があり地場の絹織物産業の発展に努力していることが分かった。米沢の袴地や長浜の縮緬は良い例である。3) 絹織物産地の生き残り作戦¹²⁾に直面した。伊勢崎では織物共同組合から、東京で開催された全国織物展示会に招待され、地場の織物の販売キャンペーンを観察した。長浜では浜縮緬の着物の展示を販売戦略の一つとして活用していた。米沢では機屋の現場を視察し社長の苦労話から今後の着物の盛衰について多くの教示を受けた。鹿児島では大島紬の生産工程（テーチ木と泥土で染める「泥染」や泥染と藍染を併用した「泥藍」という大島紬の独特な伝統技法）を見学し、高品質の着物を観察できた。日頃から近江商人についての調査も考えていたが今回の調査はその予備調査と位置付けた。

論文の内容は現地調査の強みと統計や文献からの図表を駆使した成果である。今後は近江商人に関する詳細調査を予定している。

【注釈】

1) 全国の産地の踏査実績

(平成22年度) 東北、関東、北陸

(十日町、富岡、米沢、桐生、足利、八王子、横浜、福井、小松)

(平成23年度) 近畿、九州

(京丹後、京都(西陣)、博多、小倉)

2) 3か年の現地調査(ヒアリング)の結果、主な要因は①高価である、②一人で着れない、③着る機会が少ない。対策として、①「きもの」の価格の差別化(高級から普段着までの多様化)、②レンタルの積極的な導入、③着付け教室の普及、④卒業式や謝恩会などでの「きもの」の普及活動。小生としては、2020年の東京オリンピック開催を控え、多くの訪日外国人に「きもの」を着て日本の文化を知ってもらうPR活動も必要と考える。

3) 国内の生糸生産が減少し中国やブラジルからの輸入に依存している。

拙稿：参考・引用文献の11第1章「一定の消費者の需要を満たし海外に対し絹の国、日本をアピールするためには情勢の変化から中国やブラジルからの輸入も必要である」

4) 拙稿：第3章の2の織物買継商(買継商)の活動の中で足利と米沢の買継商の事例研究を紹介している。

5) フランス人のジャガールが発明した紋織機で明治7年(1874年)に日本政府がフランスから購入した。多くの色糸で模様を織りなすので高級品の西陣織や博多織に適している。

6) 石井寛治(2006)「日本経済史」のP.136で「政商とは政府との特権的な結合を基礎に活躍する前期的資本家(商人、高利貸)であり、地租改正と殖産興業という政策に結びついて最も巨大な利益をあげた者である。三井、岩崎(三菱)、住友、安田が代表的であり、その後、産業的基盤を得て財閥(三井財閥など)に転化する」

7) 参考・引用文献の4を参照

8) 例えば、八王子は多摩の横山、桑の都(葉は蚕の餌)と呼ばれ農家の副業として機織りが生まれ

た。八王子の戦後の織物の最盛期には一日ガチャンと織れば万と儲かることから「ガチャ万」という言葉が流行した。（筆者の亡き父・卯太郎（八王子・廣田織物買継商）からヒアリング）

- 9) 起立工商会社（輸出商社）と縮緬商人（製造人＝仲買人）との間の利益分配の取り決め（縮緬類製造及び売捌方仮約定書）（明治12年）によると仲買人：45%，商社：55%。従って、仲買人の受取り（売上高利益率）は254円/1,403円=0.181（18.1%） $18.1\% \times 45\% (0.45) = 8.14\%$ 。
- 10) 新田富子は新田留次郎の妻で、詩集は参考・引用文献の5.「歌集かさね集—紅花とともに」を参照
- 11) 確かに、最近の呉服市場は「きもの産業年鑑」によると2004年の6,000億円強から2014年の3,000億円と10年間で半減している。2015年は若干、上向き傾向が予測される。その理由として、若者がファッションとして、非日常感として、又、日本文化を楽しめる機会としてレンタルやリサイクル着物に対する需要が増加しつつあり、『着物ブーム』の復活を期待したい。
- 12) 拙稿：参考・引用文献11を参照
第1章-（3）「近年は「きもの」の需要が社会構造の変化や洋服志向から大幅に減少し、絹織物は絹の小物やネクタイとして海外に輸出されている」
又、（注3）では「八王子は今やネクタイや絹の小物に力を入れている」（八王子織物組合）

【参考・引用文献】

1. 「伊勢崎織物資料目録」（2000）伊勢崎織物共同組合
2. 「シルクレポート」[財]大日本蚕糸・絹業提携支援センター 2013年5月
3. 「糸の世紀・織りの時代」—湖北・長浜をめぐる糸の文化 長浜市長浜城歴史博物館 平成22年1月
4. 三島康雄「長浜縮緬の専売と織元」千倉書房 昭和50年4月
5. 「伊勢崎の解説—伊勢崎織物の製造解説」伊勢崎織物共同組合
6. 鹿児島県庁「大島紬生産状況」（昭和49年-平成24年）
7. 新田富子「歌集かさね集—紅花とともに」精興社 昭和56年11月
8. 「三島由紀夫の文化学」（2012）文化科学高等研究院 97ページより『米沢織物の歴史』
9. 「伊勢崎織物の歴史とそのあゆみ」伊勢崎織物工業組合
10. 新田英行「米沢織、紅花の歴史」
11. 拙稿：「目白大学人文学研究」（第8号）平成24年「日本の近代化と絹織物（Ⅰ）」「生糸」「きもの」取引に携わった商人の活躍に関する一考察」
12. 「かれんとスコープ」〈呉服の市場縮小に歯止めがかかりつつある〉（日本経済新聞、2015年12月6日）原典：矢野経済研究所「きもの産業年鑑」

（平成27年11月3日受理）